

編集後記

▶「自由投稿にすればこの特集号は2冊になる」という一致した意見で最初の編集打合せが行われましたが、この数年間に進歩した技術的成果が山積みになっているのが現状でありましょう。

連続鑄造の最初の特集号 [60 (1974), No. 7] が編集された時は全粗鋼の20%が連続鑄化されたばかりで、乗り越えるべき障壁も多く、今日のような発展が短日に達成されることは予想にくかつたようです。もちろん、当時掲載された20編余の論文には基本的問題点の多くが論議されており、今日の素晴らしい発展の基礎となつていることは論をまちませぬ。

日本で稼動している連続鑄機はすでに140基を越え、全粗鋼の60%が連続鑄造で生産され、数年をまたずして80%を越えるだろうとさえ予想されています。適用される鋼種も広範囲に拡大され、きわめて困難視されていたリムド鋼さえも可能になつてきました。

こうしたいちじるしい技術の進歩は、溶鋼品質の改善、鑄片の内部及び表面の品質の向上、高速連続鑄による生産性の増大、操業の自動化などが基礎となつていきます。そして、これらの進歩は数えきれないほどある個々の新しい技術あるいはプロセスについての理論的解明によつて支えられています。

このようなめざましい発展により、多くの鑄片が直接圧延される日も間近いと推測されていますし、さらには水平連続鑄造とか同期式連続鑄造といった従来のプロセスの枠を超えた新しいプロセス誕生の可能性さえも生れつつあります。

いまや日本の連続鑄技術は、他の鉄鋼生産技術をも含め、世界の平均水準をはるかにしのぐ高さであり、10数年前海外から多くの技術を学んできた立場から、逆に多くの技術を教える立場にまで変わつています。もちろん技術輸出という形で最新技術を世界に広める必要はありましようが、それとは別に、活字によつてあるいは言葉を通して理解して貰うことも大切な事であり、いふならば科学技術を文化として世界に広めることも必要でありましよう。

それによつて、世界の国々は経済大国から輸出される商品としての科学技術としてではなく、文化として理解するようになるでしょう。そして経済大国としての恐怖が増すよりも、日本を尊敬し日本のファンとなる国々が増えてくるはずでありますし、またそういう姿になるよう努力すべきであります。

数えきれない程数多くの成果がみち溢れている現状で、自由投稿により特集号を編集すればきわめて多数の論文が投稿されることは目に見えています。従いまして、この特集号にかぎり投稿数を制限せざるを得なくなり、会員の皆様に大変なご迷惑をかけることになつてしまいました。しかしそれだけに、選ばれて投稿された論文、技術報告の多くは珠玉のようにすばらしいものであります。

このすばらしい論文集が連続鑄造技術の歴史的モニュメントとなり、日本のみならず世界の読者に愛読され、連続鑄造技術の今後の発展に大きく寄与できるものと確信しております。

(K. G.)